

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#001(高橋) (2022/04/08 uploaded)

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#001(高橋)(13:56)

<https://www.youtube.com/watch?v=CRfYskiurN0>



武蔵野学院大学ニューソロジー研究所所長・半田広宣の挨拶

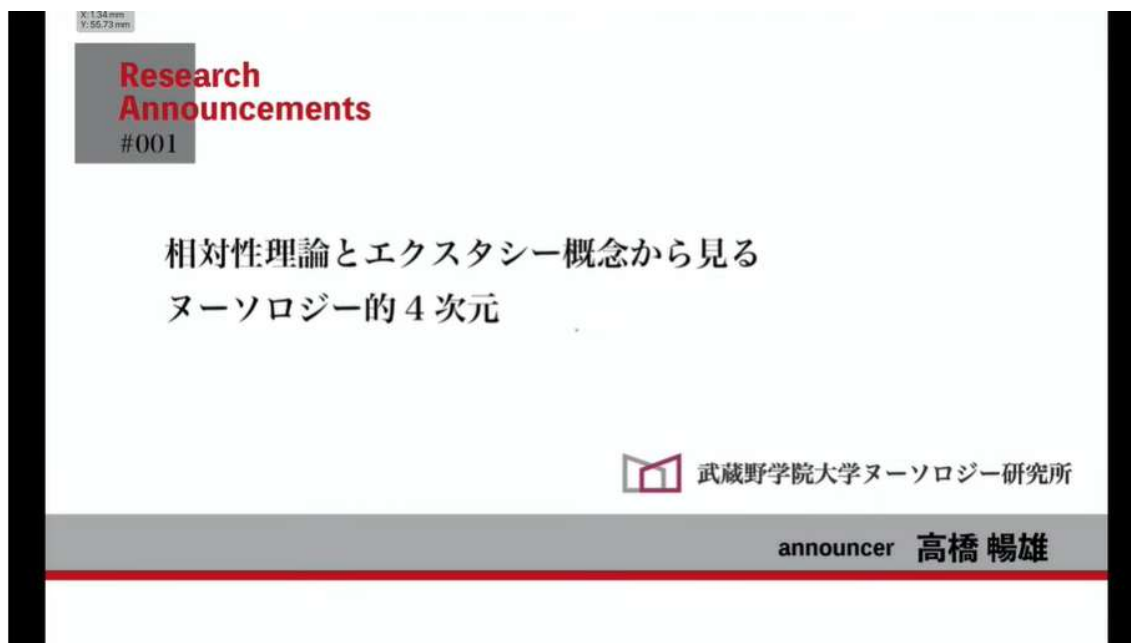
みなさん、こんにちは。武蔵野学院大学ニューソロジー研究所の半田です。

お蔭様をもちまして、この2022年4月より、武蔵野学院大学の中に正式に、ニューソロジーの研究所をスタートさせる運びとなりました。これも一重に本学の高橋学長のご尽力によるものです。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

さて、当研究所では21世紀のリベラルアーツをモットーにして、哲学を始め物理学や心理学、それから、生物学、あとはさらには社会学など、自然科学や人文科学を問わず、様々なジャンルの学識をニューソロジーが展開している新しい世界観に沿って、再編集もしくはリデザインしていくことを目的としています。

まあ、一種の学際的運動を行っていくわけですね。発足に当たって当研究所には現在既に7名の研究員が所属しています。差し当ってこの7名による研究活動がこれから開始されていくと思いますが、その中でもオープンできるものに関しましては、このニューソロジー研究所のYouTubeチャンネルを通して、随時公開していく予定です。何ぶんにもまだスタートしたばかりなので、最初はよちよちの幼児的状況が続くかとは思いますが、皆様におきましては、これからのニューソロジー研究所の活動を温かく見守って頂ければ幸いです。

ということで、記念すべき最初の発表は、当研究所の副所長でもある高橋研究員によるものです。タイトルは「相対性理論とエクスタシー概念から見るヌーソロジー的4次元」。ヌーソロジー研究所、正式にオープンです。(2:34-44)



相対性理論とエクスタシー概念から見るヌーソロジー的4次元

武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所
高橋 暢雄

みなさん、こんにちは。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所の高橋と申します。えー、今回はヌーソロジー研究所の私の発表と致しまして、1本目の動画を挙げさせて頂きたいと思います。

タイトルは、ご覧のように、「相対性理論とエクスタシー概念から見るヌーソロジー的4次元」ということで、よろしくお願い致します。

まず、皆様ご承知の通り、ヌーソロジーという理論は、一種の4次元に対する空間認識を中心概念としております。当たり前のことですが、三次元を認識するためには、観察視点としての4次元以上のものが必要となるわけです。例えば、川が流れていて、川の中にいたんでは、その魚のようにいた状態では、川が流れているという認識が正しくできないわけです。しかし、川の外にいて、川を見ている分には、川の流れを正しく認識できることとなります。同様に、電車や飛行機に乗っているときには、外を見ない限りは、正しくそれが移動している様がわからないわけですが、電車や飛行機の

外にいる立ち位置においては、それが電車が動いている、もしくは、飛行機が飛んでいるということは、容易に正しくつかめることになるわけです。同様にヌーソロジーにおきましては 3 次元と思われるこの空間に、われわれが観察地点を持つ地点には、それは意識の上では 4 次元認識をしているという考え方をもちます。この 4 次元認識についての細かい話は今回は触れませんが、類似の概念を提示することによって、これが飛躍した論ではないということをお話していければと考えております。

まず、そのための一つ目が、エクスタシーという概念です。現在では、エクスタシーという表現は、非常に性的な場面で用いられますが、本来はギリシア語でエクスタシス、「外に立つこと」というような意味から、始まっている言葉ですけど。皆様ご存知の通り、プラトンという偉大な哲学者が『パイドン』という本を残したようです。『パイドン』はソクラテスが死に臨んで刑死される際に、その目前に肉体と魂の関係、つまり、生と死の関係を話したエピソードを対話形式で描いているお話です。この中で、「何かを純粹に見ようとするなら、肉体から離れて、魂そのものによって物そのものを見なければならぬ」という台詞が展開されており、繰り返しになりますが、これは死と魂の不滅がテーマですので、必ずしも空間を認識するためのものとは限りません。しかしながら、コンセプトとして、対象に対して、その同列に在るのではなく、そこから外れた視点で、もうちょっと言葉を変えれば、そこから影響を受けない場所で、観察をしているということが、本来観察に必要な、最低限な要因であるということが、ここからもうわかるわけです。ちなみに、この『パイドン』の中で、ソクラテスがアナクサゴラスのヌースという考えに非常に感銘を受けて、それに対して勉強したというエピソードも載っておりまして、これもどういう流れから来ているかと言いますと、ソクラテスが万物の原因はどこから発生しているのかということを考える中で、どうもヌース、つまり、理性にそれはある、というふうに述べていると言って、その本を喜んで読んだんだけど、実際にはそう論じながらも、空気であるとか、水であるとか、アイテールであるとか、水であるとか、等々、別のものを例示することによって、それを説明しようとしたので、ソクラテスは失望してしまったというエピソードが書かれています。とはいえ、ソクラテスはこのアナクサゴラスの影響で、魂というものはどうも理性でできているという概念を持ったわけです。じゃあ、その理性の特徴は 3 次元世界と同じ位置にいるようでいながら、自分の観察の本体、正体は 3 次元の中にいないと。そして、それは魂の作用であるから、死によって肉体と共に消滅しないと。むしろ肉体のあることによって、3 次元の社会に拘束される部分が出るので、夾雑物が混じって正しい認識ができないと。こういう仮定でソクラテスが語っていることが、プラトンの『パイドン』では描かれている。現代のわれわれはそれを用いてヌーソロジーを語っているわけでは必ずしもありませんが、このようなものがあることから、遥かギリシアの昔から、3 次元と同じ所に落ち込んでしまえば、正しい観察はできない。観察をできているということは、自分の視点や意識は 4 次元として機能しているということがご理解して頂けるんじゃないかと思います。ちなみに、この『パイドン』の中で、先ほど申し上げた万物の原因、つまり、生成・消滅についての原因というものをソクラテスが考えたというところが、アイデアという話の具体的な最初の例示だと言われています。プラトンのちアイデア論者と言われるようになるスタート地点はこのソクラテスの観察視点が 4 次元であ

る——現代風に言えばですね——というところに軸があるということがおわかり頂けるのではないかと思います。

もう一つだけ例示を挙げさせて頂きまして、本論をまとめたと思っていますが、二つ目は皆様ご存知のアインシュタインによって 20 世紀初頭に行われました相対性理論。これは特殊相対性理論、一般相対性理論という形で、現代でも大変有名な理論で、物質とエネルギーの関係がどうなっているだとか、時間と空間がその捻じ曲がっている。それに光や重力というものが一役買っているというようないろいろな理論で、それが非常にいろいろな場面で役立たされることによって、現在でも著名な影響力を持っているわけですが、ここで申し上げたいのは、このアインシュタインの相対性理論の一番根幹になったコンセプトが何かということです。ニュートン物理学のような、座標軸が一つである。つまり、3 次元の中にわれわれもいるというような形では多くのことが説明できなくなったわけですね。しかしながら、アインシュタインは座標軸を複数作ることで、これを解決しようとしたわけです。ですから、先ほどの例示のように、電車に乗っている人の座標軸と電車の外にいる人の座標軸は座標軸が異なる。有名なのは光速度で宇宙に行った人と、地球にずっといる人たちで時間の感覚が異なっていくというような例示が著名ですけども。これは根本的に時間と空間が立場で違うということを言ってるわけですけども、これは座標軸を複数立てるということがこのコンセプトとして一番重要なところだと、わたくし自身は考えていると。したがって、それによって座標軸が違うことで、それをブリッジする光速度というものに対しては共通項を掛けることで、重力等の歪みがいろいろ働いて、時間や空間、さらには光も曲がる。という、空間が曲がるということは光も曲がることですけども。そういうようなものをアインシュタインは理論づけたこととなります。しかしながら、これは複数の座標を持つ。つまり、空間と思っているところに、同じ空間の中に、違う座標を立てることはごくごく当たり前であるということを表していることとなります。

いかがでしょうか。このような話をご理解頂けた中で、ヌーソロジーにおける元止揚の空間の認識を皆様方にも深めて頂けますと、非常にありがたいことだと思ひまして、この研究動画を撮らせて頂きました。また次の研究動画でも、皆様に資するものが発表できればと考えております。今回の動画は異常で終了させて頂きます。どうもありがとうございました。(13:26/13:56)(了)

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#001(高橋)

(2022/04/08 uploaded)

<https://www.youtube.com/watch?v=CRfYskiurN0>)